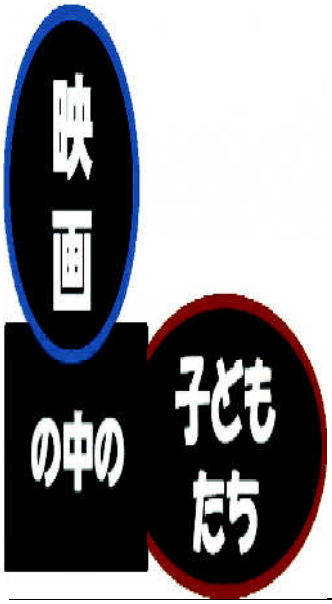

第４回「その街のこども（劇場版）」

－悲しみの中から生まれる希望－

川﨑　二三彦

この連載を始める前後から、映画を観る機会がめっきり少なくなってきたような気がしてしまう。現場にいた頃は、多忙なさなかに月間５本、年間 50 本を目標にして足繁く映画館に通っていたというのに、今はせいいぜい月 1～2 本。単身赴任の身だから、誰に気兼ねするすることもなければ、突然予定を変えなければならぬような業務でもない。ちなみに前回紹介した「冬の小鳥」以後に見た映画は、「小さな村の小さなダンサー」「ふたたび」「ドン・パスクワーレ」「シチリア・シチリア」「愛する人」ぐらいかな。ウウム、これでは連載も風前のともし灯…。

“こんな変な体験、あまりしたことないよな”

通勤客でぎゅう詰めの満員電車内。映画を見終えた帰途、窮屈を承知でパンフレットを広げているうちに、上映中はこらえていた涙がいつのまにかじわりと滲んできたのである。主人公美夏の親友ゆっちの父親役を演じた白木利周さんへのインタビューを読んでいたときのことだ。

「私より百倍もええ子やったのに、なんで死ぬんや。震災て、わけわからへん」

「ええおっちゃんが、なんであんなにボロボロになるまで苦しまなあかんねん!」

「おっちゃんはな、むっちゃ恐かったから、話しかけられへんかったんや」

などと回想するシーンが続いたあと、マンションで一人暮らすおっちゃんを深夜に訪ねるシーンとなるのだが、「美夏です」と聞かされ、インタホンを通じて応答するその声に、正直言うと、拍子抜けした。“普通すぎるやん”と思ってしまったからだ。が、パンフを見てわかった。この人は俳優じゃなくて市井の人。実人生では、当時神戸大学の学生だった息子を震災で亡くしていたのである。

「もし、おっちゃんの立場だったらどんな想いになるのかなと……。役者でもないし、なんでもないんだけれども、震災のことを想うと、瞬間的に、すっと役に入り込んでいけました」

ここで話されているのは、おそらく演技のことではなく、おっちゃんの心情のことだろう。

「震災の傷だけを抱えていたら、おっちゃんと同じような振る舞いをするだろうなとは想います。でもね、美夏が来ることで、『自分のことを想ってくれる人がいるんだ』ということに気がつくじゃないですか。それまでは誰も来てくれな

かったという寂しさもあったでしょう。でもあの日、こどもの友人が来てくれた。それだけで感激しているはずなんです。私だってあの立場だったら、夜中でも迎え入れますね」

と、ここまで書いてきて思うのは、この映画、あくまでも映画であり、フィクションではあっても、そのように割り切って観ることは難しいということだ。美夏と勇治、主人公の二人が被災した時の年齢は、中1と小4に設定されていたけれど、私も思わず計算した。そうだ、うちの息子も震災の時は勇治と同じ小４だった……。

“京都もすごく揺れたよな。前夜は小６の娘の誕生日だったから、ケーキを買って祝ってたんだ”

“震災当日は京都府の児童福祉司会議だった。セッションが終わって皆でテレビの前に駆けつける度に、被害が広がっていったよな”

震災15年目の前夜、新幹線・新神戸駅で偶然出会った二人が神戸の街を歩いて行くうちに、次第に心を通わせていくロードムービー。なんだけれども勇治の語り口調が、また語彙不足としか思えぬような言葉の選び方が、やたら息子のしゃべりと似ているので苦笑してしまう。

それにしても、人が自分に対して、あるいは自分が心にとどめていることに対して素直になり、それを開くためには、“時”が必要であり、また“場”が必要なんだと、改めて思う。子ども時代の震災体験を、彼らはたぶん忘れようとし、どこかに閉じ込めていたはずだ。ところが、二人が出会った時と場所が、少しずつそれを溶かしていく。そして最後のシーン。“追悼のつどい”が行われる東遊園地にたどり着き、別れが迫って勇治が握手を求め、美夏がそれをさえぎって抱き合う場面は、何ということはないけれどジーンときましたね。

＊

私はテレビドラマを殆ど見ないので、この映画が、震災15周年となる2010年1月17日、NHKで放映されたドラマだったことも、それが絶賛され、今回劇場版として再編集されたということも全く知らなかった。それに主役の森山未來、佐藤江梨子、二人ともが震災を体験していたこと、脚本の渡辺あやも西宮出身で、書き上げるまでに強い葛藤を抱えていたことも、もちろん知らなかった。

とはいえこの作品、震災という体験を別にしても、すごく上質な映画だと私は思う。特に前半部分では、いたるところで思わず噴き出したくなるようなシーンが顔を出して楽しませてくれたし、たった一夜、それも神戸の街を二人で歩いただけだというのに、ラストまでくると、知らず知らずのうちに彼らが何かを得、何かを感じ、そして確かに成長したということが、ひしひしと伝わってくる。そして、おそらくは映画を観た誰もが、そこに生きる希望を発見する……。決して泣けるだけの映画ではないのである。とはいえ帰宅後、ネットでドラマ版の予告編を見ていたら、またしても目頭が……。

＊鑑賞データ：2011//02/08 東京都写真美術館
＊公式ホームページ http://sonomachi.com/
＊Twitterへの投稿　http://coco.to/movie/2225